

**最近、ヒノキチオールは、多くの生理作用や抗菌作用があることが判り、  
利用されてきています。**

国立小児病院・小児医療研究センター免疫アレルギー研究所の研究によると、ヒノキチオールには殺菌作用があり、天然成分であるため副作用がほとんどないことが確認されています。菌種を問わず多くの菌に対して抗菌作用を示します。とくに腸内細菌、破傷風菌、結核菌、MRSAなどに強い抗菌効果があります。

また、カビが原因で発生する樹木の病気(腐乱病、紋羽病)等やミツバチのチョーク病に対して高い効果を発揮します。

そしてなにより耐性菌の出現をほとんど許さないという特徴を有しています。

**○防腐剤**

防腐剤としての効果があり、平成元年には化学合成品以外の食品添加物として認可されました。このことにより食品への活用が増加すると予測されます。

表－1 ヒノキチオールの各種菌類に対する最小発育阻止濃度(1994 斎藤)

菌種	最小発育阻止濃度 ( $\mu\text{g/ml}$ )
黄色ブドウ球菌 ( <i>Staphylococcus aureus</i> ATCC 29213)	100
連鎖球菌 ( <i>Streptococcus faecalis</i> ATCC 29242)	100
大腸菌 ( <i>Escherchia coli</i> ATCC 25922)	100
緑膿菌 ( <i>Pseudomonas aeruginosa</i> ATCC 27853)	200
霊菌 ( <i>Sereatia marcescens</i> )	100
プロテウス菌 ( <i>Proteus mirabilis</i> )	100
枯草菌 ( <i>Bacillus subtilis</i> ATCC 6633)	50
黄コウジカビ ( <i>Asoergillus oryzae</i> )	25
リンゴ腐乱病菌 ( <i>Valsa ceratosperma</i> )	50
紫紋羽病菌 ( <i>Helicobasidium monpa</i> )	50
灰色ブドウカビ菌 ( <i>Botrytis cimerea</i> )	100
カワラタケ ( <i>Coriolus versicolor</i> 林試 1030)	25



## ヒノキチオールの歴史

このヒノキチオールは野副鉄男博士によって発見され、1950年にロンドンで開かれたトロポロン研究会で全世界の注目を集めました。野副博士はこのヒノキチオールの研究業績により、昭和28年に学士院賞を、昭和33年に文化勲章を、また昭和47年には勲一等瑞宝章を受賞されています。

ヒノキチオールが世界の科学者、医学関係者の関心を集めたのは、まずこの物質が非常に優れた殺菌作用をもっていて、この抗菌力によっていろいろな方面に有効な薬理作用を示すからです。この殺菌作用に関する医学的研究、臨床実験の報告はたいへん多く、たとえば白癬菌に対しては20ppm、大腸菌に対しては10ppm。チフス菌に対しては12.5ppmという、いずれも低い濃度で阻止力を示し、熱帯性潰瘍に対してはペニシリン、リバノールその他種類の療法が無効におわった例においてもヒノキチオールはきわめて満足すべき結果を得たことも報告されています。



## ヒノキチオールの有効性

**ヒノキチオールには殺菌作用のほかに、すぐれた消炎作用があります。**

また、浸透力に優れ、皮膚の深部に入り皮膚の細胞に適度の刺激を与えることにより**細胞の新陳代謝を正常化する働きがあり**、強力な細胞賦活作用が確認されています。

**さらに、ヒノキチオールは、歯槽膿漏に対する治療、予防効果や口臭除去の効果**、白癬症、円形脱毛症の治療効果あるいは毛髪発育の促進作用があるという臨床報告もあります。これらの作用は、基礎美容料には欠かせない働きとなっていて、かつ副作用がないことが大きな特徴です。

一方、基礎美容料の役割は、まず肌を清潔にし、肌の健康を守り、皮膚細胞の新陳代謝を正常にしておき、年齢的な衰えを防ぎ、若々しい肌を保つことにあります。さらに一歩進んでトラブルのある肌を正常化することも大きな役目です。したがって、ヒノキチオールは基礎美容料の薬剤として大切な成分であるといえます。ヒノキ肌粧品には、このヒノキチオールが配合されており、ほかの薬剤とともにすぐれた特徴を発揮しています。